

策士なエリート弁護士に  
身分差婚で娶られそうです

---

伊東悠香

*Yuka Ito*



Eternity  
BUNKO

## 目次

策士なエリート弁護士に  
身分差婚で娶られそうです

一年目のジェラシー

書き下ろし番外編

ニャンペンの恩返し

策士なエリート弁護士に

身分差婚で娶られそうです

## プロローグ

軽くソファの上に押し倒され、私は目を丸くしていた。

上に覆い被さってくる橘<sup>たちばな</sup>さんは、ゾクつとするほど冷たい瞳で私を見下ろしている。

「な……にを——」

言葉を遮るように指で口を封じると、そのままずりりと胸元に手が滑りこんでくる。

「あ……」

ヒヤリとした感触に体がビクリと跳ねた。

その反応に彼は意地悪く微笑む。

「感度いいね。なんだ……ずっとこれ期待してた？」

「し、してないです」

「嘘。欲しいって顔してるよ」

「違いますっ」

言葉通りに抵抗をしているつもりでも、遠慮なく触れられていく肌の心地よさに甘い

痺れが止まらない。

（私、どうしちゃったの……もっと触れてほしいなんて）

両足の先を焦<sup>じ</sup>れつつく擦り合わせると、その仕草を見て彼は嬉しそうに笑う。

「なにか足りない？」

「なにもない、です」

「じゃあ望み通りやめようか」

「えっ」

触れていた手が止まり、彼は一旦私から離れた。私を包んでいた温もりが消えたことに寂しくなり、やめないでと口にしそうになる。

慌てて口をつぐむけれど、公輝<sup>まさあき</sup>さんは私の反応を見逃さなかった。

「続けてほしいんだよね？」

「ちが……」

「違うない」

再び落とされたキスに言葉が飲みこまれ、スカートの中へ手が忍びこんだ。

「……っ」

「濡れてる。これでも否定するの？」

（恥ずかしいっ）

心を見透かすような、そんな言葉を口にしながらい長い指先が熱を帯び始めた秘部をなぞる。

「あ……ん」

たまらず声がもれ、さらなる恥ずかしさに首を左右に振った。

（私じゃない、こんなの……違う）

すると彼は手を止めて、涙目になる私をまじまじと見つめてくる。

「三国さんって嘘つきだね。体は嫌がってないのに口では嫌だって言うんだ」

「嘘なんて……」

（私にもわからないよ。なんで……こんな突然のアプローチが心地いいのか）

従順になりたいわけじゃない。

そう思うのに、ゆるゆると刺激される体の感覚は決して嫌悪するようなものではない。

かった。むしろその反対で……

「まだ欲しいなら素直に言ってみて」

「……無理です」

「無理ってなに」

押し当てられた唇から甘いセリフと共に吐息がかかる。

そこは私のたまらなく弱いところだ。

（耳はだめ……抵抗できなくなる）

両手で耳を塞ごうとするけれど、彼は強引に手首を提えてシートに押しつけた。

「抵抗が弱いな。ほんと……君って結構なM気質だね」

くすくす笑いながら、彼の指はブラウスのボタンを器用に外していく。

同時に首筋に痛いくらいのキスが落とされ、心とは裏腹に体が心地よさで震えた。

「ふ……あ」

「素直になってきた。もっと欲しがらせてあげる」

唇へのキスをしながら、さらに欲するよう誘導する。

（このままじゃ、言葉通り流されちゃう。なんで……どうしてこんなことに……？）

## 第一章

遡ること一ヶ月前、それは弟の電話から始まった。

「えっ、借金？」

久しぶりに私のアパートを訪ねてきた純也は痩せ細って顔色も悪くなっていた。

ゲーム仲間の友人と一緒に立ち上げたゲーム会社のことは前から聞いていて、とても

生き生きと準備を進めていたのがつい二ヶ月ほど前の話だ。

だから、どうしてこんな状態になっているのかと驚く。

「太い出資をしてくれるはずだった資本家が急に心変わりして……払えるはずだった金  
が、まるっきり当てがなくなっただんだ」

「それって、少しずつ払うわけにいかないの？」

私の質問に純也は、力なく首を横に振った。

「額が大きすぎる。月割で払っていくにしても、生活が成り立たないくらいの額になる  
んだ」

「いくらなの？」

「……とりあえず……二千万円くらいかな」

（とりあえずってことは、まだプラスアルファがあるんだ）

確かにアルバイト程度では追いつかないような数字だ。

沈没しないように活動する資金として取り急ぎ数百万円は必要らしい。

とはいえ、弟がそれを用意できるはずもなく、このままだと会社をたたむだけでなく  
借金を背負って酷い生活になるのが目に見えた。

（私もそんな額は持っていないし。今勤めてる会社じゃ、給料が上がる様子はないし……）  
「作品はもうできてるんだ。リリースして、利益が出るまで待つてほしかったんだだけ

ど……今は似たようなゲームをバンバン出してる会社があるし。個性がないって言わ  
れて」

「そんな。一度は目をかけて出資を約束してくれたのに？」

「なに言ったって無駄だよ。俺たちもすっかり相手を信頼しちゃってさ……世間知らず  
だったんだよ」

この一件で、純也はすっかり人間不信になってしまったようで、私以外の人間に同じ  
相談をするつもりはないと言っている。

一緒に開発に携わっている友人もショックで引きこもってしまい、今は全く希望が持  
てない状態みたいだ。

（酷いな……こんなに頑張ってきたのに）

純也は勉強よりゲームが好きで、親に怒られてもゲームへの熱は冷めることがな  
かった。

それどころか高校を卒業したと同時にプログラミングを勉強し始め、独学でエンジニ  
アになり、ゲーム会社で下積みを重ねていた。

そんな中で出会った同じゲーム仲間と、今回ようやくオリジナルのゲームで独立しよ  
うとしていた矢先だった。

（約束一つ守れない人間の犠牲になるなんて我慢できない）

フツフツと湧いてくる怒りが抑えきれず、私は思わず叫んでいた。

「お姉ちゃんに任せて！」

「え……任せるって？ やだよ俺、姉ちゃんが身を売ったりするのは」

「バカ！ 誰が身を売るのはよ。給料のいいところに転職して、お金を作るから」

「……嬉しいけど、姉ちゃんこの前実家の外壁工事費も出したばかりじゃん」

「まあ……ね」

自営業者の両親は元々借金を重ねながら生活しており、家の修繕費なんかとても出せる様子ではなかった。

でも実家の家屋は限界まで老朽化していて、私はその時持っていた貯金をすべてはたいてリフォームしたのだ。

「でも、親は親。純也は純也。大切な家族のためなら力になるのは当然と思ってるから」

「姉ちゃん……」

純也は目を潤ませながら、こくりと頷いた。

「姉ちゃんが協力してくれるのは心強いよ。でもホント、可能な限りでいいよ。俺も自力でできることはどうにかするから」

「どうにかって？」

「プログラマーのバイトをする。お世話になってる人が仕事をくれるって言ってくれてるんだ。だからそこで頑張れば、少しは金になると思うから」

純也は私にだけ苦労はさせられないと自分もギリギリまで頑張るつもりだと言った。

そんな彼だからますます私は力になりたいと思ってしまふ。

「じゃあお姉ちゃんは早く借金を返せるように少し応援するよ」

（せめて借金の半分はどうにかしてあげたい）

「うん。ありがとう。友達もきつと喜ぶ」

純也は少し希望が見えたように表情を和らげると、私が用意したご飯を少しずつ食べ始めたのだった。

それから私はすぐに行動を起こした。

元々働いていたブラック気味の職場を退職し、最低二倍のお給料になる条件を探して毎日転職活動をした。

とはいえ、華やかな経歴があるわけでもない私が条件のいい仕事に就くのは簡単ではなく、届くのは不採用通知ばかりの現状だ。

（やっぱりすぐにたぐさんのお金を得るっていうのは簡単じゃない……か）

秘書検定を取得していること、多少英語ができることを活かしたかったのだけれど、今どきこれくらい能力を持っている人は多い。

能力のある人じゃないと、いいお給料は望めないのか。そう絶望しかけた時、秘書という職種に驚きの金額が提示されている求人が目に入った。

「タチバナ法律事務所……所長秘書、月給……え、本当に？」

目を疑ったけれど、本当に私が望んだ通りの給料が約束されている。

恐ろしく大変な仕事なのかもしれないと思いつつも、ここ以外に同じような条件を出している会社は見当たらない。

（大手企業も驚くようなお給料で、おまけにボーナスも年に三回出る。これだけの条件ならきつと競争率も高いよね……それでも可能性がゼロじゃないなら……いちかばちか、ここに賭けてみよう）

そう思い立ち、私はその事務所向けに履歴書を作成し始めた。

なんとか電子履歴書をアップロードするところまで終えたものの、返信が来るまでどうにも気持ちが悪く落ち着かない。

（この事務所がどんな雰囲気なのか見てみたい……偵察がてら出かけよう）

私は善は急げとばかりに着替えると、最寄り駅まで自転車走らせた。

四月半ばの風はまだ肌寒さが残っていたけれど、そんなのは今の私にはさほどこたえなかった。

いくつか駅を経由して、都心の街にたどりついた。

少し迷ったものの、事務所が入っているビルはとも目立つのですぐにわかった。

「これがタチバナ法律事務所の入っているビル……」

都心に建ちながらもそれなりの面積を保有したビルで、ピカピカの窓ガラスからは綺麗でお洒落な待合室が見える。

全体的に新しくモダンなデザインで、一見すると高級マンションかなと思ってしまう。

（ここに事務所を構えられるだけでも、相当に繁盛しているのがわかるなあ）

事務所の悪い噂は特になく、とにかく経営者である弁護士が優秀だという評価が多い。小さな仕事から大きな仕事まで、スピーディーに確実に勝利へと導くのがモットーだとか。

（頭の切れる弁護士ってなんか冷たくて怖いイメージあるけど、大丈夫かな）

二十階以上ありそうなそのビルを見上げていると、入り口のドアから一人の男性が出てきた。

その人はスラッと背が高く、身につけたスーツから体型が整っているのが遠目にもわかる。

色素の薄い髪が風になびくと光が反射するように煌めき、通りかかった人は思わず二



度見してしまうような目立つ容姿の人だ。

（芸能人なのかな）

そう思っただけで視線を向けていると、その人は私のほうを見て嬉しそうに手を上げた。誰に振っているのだろうと後ろを振り返るけれど、私の他には誰もいない。

（まさか私？）

スーツの襟元には存在感ある弁護士バッジが光っていた。

（この人、もしかしてタチバナ法律事務所の人？）

「お待たせ」

「え？」

「いやあ、ミーティングが思ったより長引いちゃって」

目の前まで歩いてきた彼は、当然のように私の肩を抱いて歩き出す。

「ちょ……っ」

顔を上げると、ぐんと近づいたその人の顔は遠目に見るよりもっと整っていて驚く。

それになにより――

（声がすごくいい）

体の芯をくすぐるような、抑えめな低音がゾクリと響く。

（顔が整ってる上に声までいいなんて、本当に俳優とかじゃないのかなあ）

そんな感想を抱いていると、突然後ろから女性の高い声が響いた。

「……っ！……待って！」

「あの、あの、あなたを呼んでるんじゃない……」

「黙って」

彼は私の声を封じると、そのまま強引に進んでいく。

「歩調を合わせて。嬉しそうにしてて」

（なにこの人……強引すぎ！）

「離してください」

「だめ」

肩に置かれた手を払おうとしたが、がっしりホールドされていて離れられない。

「もう少し我慢して」

「ええっ」

歩調はますます速くなり、後ろの声は小さくなっていく。

「私――諦めない――っ！」

（諦めない？ こじれたカップル？ なんなの……！）

さながら恋人同士のように密着しながら数百メートルほど歩いたのだろうか。

男性は路地裏を通った先にあるレストランのドアを開け、私をぐいっと押しこんだ。

「う、わっ！」

カランツと音が響いて、ドアがバタリと閉まった。

「いらっしやいませ」

中に客はほとんどおらず、柔和な表情をした男性店員が一人いるだけだ。

アンティークのスタンドが間接照明となり、店内をムーディーに照らしている。

「……諦めたか」

男性はそう呟きながら、窓から外の様子を窺っている。

「あの。私、もう行つていいですか」

恐る恐る質問すると、男性はこちらを振り返って改めて私をまじまじと見た。

そしてクスリと笑うと、私の肩から手を離れた。

「協力ありがとう、助かったよ。付き合ってくれたお礼に、この店のものをご馳走しよう。今日の予約はもうないだろうから」

「え、ご馳走って？」

（どうしよう。こんな訳のわからない展開でご馳走になっていいんだろうか）

戸惑う私の背に軽く手を当て、奥のテーブル席へと案内される。

椅子を引いてニコリと微笑む姿は、高級料理店のウェイターみたいだ。

「どうぞお姫様。おかけください」

「あ、ありがとうございます」

（ご馳走になるってまだ言っていないんだけどな）

今さら断れない雰囲気になり、仕方なく椅子に座る。

すると目の前には美味しそうなプレートランチの写真が並べられた。

「美味しそう」

「うちのメニューはどれも好評だから。味は保証するよ」

（食べるつもりなかったけど、こんなの見せられたらお腹が鳴ってしまう）

結局私はバスタとグラタンのセットをお願いして、食前に出てきたフルーツジュース

も遠慮なくいただいた。

「美味しい！ これ、手作りジュースですね」

私がすっかりご機嫌になったのを見計らい、男性はふっと嬉しそうに目を細めた。

「料理はもっと美味しいよ」

「そうなんですか？ 期待しちゃいます」

「期待には存分に応えられると思う。じゃあ五島、会計はいつも通り事務所に請求して」

「かしこまりました」

五島と呼ばれた男性は、丁寧に頭を下げてスーツの男性を見送った。

（なんだったんだろう……変な人）

唐突すぎる彼の振る舞いに首を傾げていると、五島さんが申し訳なさそうに言った。

「申し訳ありません。公輝様はあのようなことが日常茶飯事でして」

「日常、なんですか。大変そうですね」

（あの人、まさき、っていうんだ……思いがけず名前を知ってしまった）

「ふふ、まあどうぞせっかくですからお召し上がりください」

出来立ての Pasta とグラタンを見て、急に空腹に襲われる。

ツヤツとしたキャベツとアンチョビの Pasta に、エビをふんだんに使った表面がカリカリのグラタンは見ているだけでヨダレが出そうなほど美味しそうだった。

当然味も美味しくて、私はそのランチをペロリとたいらげてしまった。

（これは……大抵の失礼は許せてしまうなあ）

五島さんは慣れた手つきでコーヒーを淹れてくれ、美しいカップと共に差し出してくれた。

「お嫌いであればケーキもお出ししましょうか」

「は、はい。ありがとうございます！」

素直に喜ぶと、五島さんは優しげに目を細めた。

話しやすそうな空気を醸し出す五島さんに、私は思わずさっきまでの経緯を愚痴まじ

りに話した。

「——というわけで、かなりビックリしました」

「そうですか」

五島さんは同情するようにこくりと頷いた。

「災難でしたね」

「本当ですよ」

コーヒーを一口すすり、ふと不思議に思っ顔を上げる。

「あの、ここって……普通のレストランじゃないんですか？」

（今日はもう誰も来ないだろうからって言ってたよね）

「ここはタチバナ法律事務所の秘密基地のようなものでして。ご予約された方しか入れないレストランでございます」

「秘密……ってことは、事務所で話せないことを相談する場所、ってことですか？」

「まあ、そのようなところです」

五島さんは困ったような笑みを浮かべた。

（後ろ暗い事情でもあるのかな。これ以上は聞かないほうがよさそう）  
そう思い、私は口をつぐんだ。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

コーヒーをいただいたあと、私は五鳥さんにお礼を言ってレストランをあとにした。

数日後、書類選考が通ったという連絡が来て私は歓喜の声をあげた。

「よかった！ 絶対無理だと思っていたのに。可能性が出てきた」

（事故みたいな出会いだったけど、あの日事務所の弁護士さんと顔を合わせたのも、なにかの縁だったのかも）

「採用されますように」

願いをこめて髪を整え、スーツをまとい。

「いざ！」

と、気合を入れて事務所のあるビルへと向かった。

一度外観は見ていたものの、中に入るのは初めて。緊張しながらエレベーターで最上階まで行く。

このビルの最上階は特別らしく、フロアの真ん中には庭園が広がっていた。

（空が見えて開放感があるなあ）

窓越しに空を見上げ、ここで働く自分を想像した。

（うん、いい感じ）

すっかりイメトレをすると、面接時間に合わせてインターホンを鳴らす。すると、落

ち着いた男性の声が返ってくる。

「本日面接予定の三国様ですね。ドアは開いてますので、どうぞ中へお進みください」

「ありがとうございます」

恐る恐るドアを開けて中に入ると、五十代くらいの物腰柔らかな紳士が出迎えてくれた。落ち着いた雰囲気ながら、目の奥にはすべてを見抜くような鋭さが宿っているように見える。

（厳しそうな人だな）

「はじめまして。三国と申します。本日はよろしくお願いいたします」

第一印象はなにより大事と思い、丁寧なお辞儀をして笑顔を浮かべる。  
すると男性も目を細め、最初より少しだけ優しい表情になった。

「こちらこそ。私は橘の秘書、柴崎しばさきと申します。では所長と対面していただく前にまず私と面接していただきます、どうぞ応接室へ」

「はい」

私は柴崎さんの丁寧なエスコートに従い、ガラス張りの立派な応接室へと足を踏み入れた。

応接室に置かれたソファに腰掛け、私はまず柴崎さんからヒアリングと称して主に私自身のことに関する質問を受けた。その内容は驚くほどシンプルで、面接というには気

が抜けるほどのものだった。

「——だいたいわかりました」

タブレット端末に入力し終えると、柴崎さんはそれをテーブルに置いて私を見た。

「当方に応募されたのは主に給与面に魅力があったからということですね」

「そうですね」

「他の会社などよりも高めに設定をしていることには理由があるのですが、それをご承知いただいていると思つてよろしいですか？」

「内容によりますが……」

（お給料を弾<sup>は</sup>まないと思つてよ）  
「お給料を弾<sup>は</sup>まないと思つてよ」  
「内容によりますが……」

一抹の不安はよぎるけれど、ここで怯むわけにはいかない。

「私ができることでしたら、お給金以上のお仕事をするよう頑張るつもりです。いい加減な気持ちでは来ていませんので。よろしくお願いします」

「……いいでしょう。では、こちらの要求する仕事を伝えます。よろしいでしょうか」

「はい」

いよいよ本格的な仕事内容を聞くこととなった。

姿勢を正して改めて話を聞く体勢になると、柴崎さんは厳しめの口調で言う。

「所長秘書としての事務的な仕事は主に私がやっており、特に不便はありません。なので、第二秘書にお任せしたい仕事はもっと目に見えづらいものとなります」

「見えづらいもの？」

「はい。橘のモチベーション維持が主な仕事になります」

「メンタルケア、的なことですか？ 私、心理学などは学んでいないのですが」

「そういう学術的な知識は必要ありません。重要なのは相性でして」

「相性」

「ええ。これが……なかなか適した人がおらず」

本当に苦労しているようで、柴崎さんは眉根を寄せて小さくため息をついた。

話によると、所長である橘さんは相当な切れ者だけれど気難しい一面があるらしい。

文句なしに頭のいい方で、海外の大学を出たあとは日本に戻ってきて司法試験に一発合格。大手事務所に入り名を上げたあとは独立して今の事務所を一人で設立したという。

この事務所は広告を一切出しておらず、口コミのみで顧客を増やし……今や業界内で彼の名前を知らない人はいないのだとか。

（相当に優秀な方なんだ）

総合的に優れすぎている弁護士であるため、高額な弁護士費用に文句を言う人はいないという。

「すごい方なんです」

「ええ。一度スイッチが入ればあの方は無敵です。ですが、先ほど申し上げた通りまぐれな性格でして……そこが唯一の問題点といえますか……」

「それでモチベーション、ですか」

「ええ」

そんなすごい先生のやる気を私が維持できるとは思えない。

でも、柴崎さんは書類選考の段階で、私にある程度それは望めると思ってくれていたみたいだ。

「あなたは共感する力がとても高いそうですね」

履歴書を出す時に一緒に提出するように言われていた性格テストやEQテストの結果を見ながら、柴崎さんが目を光らせる。

（そういう部分を見てるんだ）

「ええ、まあ。弟には気にしすぎ、お節介すぎって怒られることもあります」

大勢の人と関わろうとすると、たくさんの方の思考が流れ込んで疲れたりもする。

とはいえ人と接するのは嫌いではないから、週末はボランティア活動に参加することもある。

「なるほど……やはりあなたで正解のようです。私どもはそのような方を求めています」

した」

「と、いいですよ」

「他人の気持ちを理解できて、どこまでも人の役に立ちたいと思っているような方。そのような方でないと、第二秘書の仕事は務まらないということです」

（私、そんなにすごい人間じゃないんだけどな）

「私がお役に立てるのならば、嬉しいですが」

「採用になった際には期待していますよ」

「は、はい。それはもちろんお任せください！」

（なんだって破格のお給料だし。採用してもらえらるなら、それに見合った仕事をしないとね）

結構なブレッツシャーをかけられた気がするけれど、弟のために仕事をしたいという熱意は変わらなかった。

「では、次は所長面接となりますが……」

柴崎さんは私をチラリと見てから、腕時計に視線を落とした。

「お疲れになったでしょうから、中庭で少し休憩されては？　うちの庭はちょっとした自慢ですし、今の時間は誰もいないのでゆっくり休めるでしょう」

「はい。そうさせていただきます」

「このまま所長面接だとキツいって思ってたから、嬉しい」

「では……」

私はそそくさとバッグを肩にかけると、ソファから立ち上がった。

「では、少し失礼します」

「十五分したら戻ってくださいね」

「かしこまりました」

柴崎さんに丁寧にお辞儀をしてドアに向かうと、足がカクカクした。

（緊張しすぎて、体がガチガチだ）

傲慢というだけあって、フロアの真ん中がくり抜かれたようになった庭園には都会の喧騒<sup>けんそう</sup>を忘れられるような静けさがあった。

「法律事務所っていう堅いイメージが和らぐなあ」

お洒落<sup>しやれつ</sup>な白い木製ベンチに腰を下ろし、辺りを見まわした。

どうも今日の面接は私だけなんじゃないかという気がしてくる。

そう思うくらい、私一人にかけている時間が長い。

（ライバルがたくさんいるだろうなって覚悟してたから、ちよつと意外）

「さっきのヒアリング、すでに最終面接みたいな感じだったし……」

なにを尋ねられたかノートに記録し終えると、私はふうと息を吐いて空を見上げた。

雲が流れていく様子をぼうっと見ていると――

「いい天気だね」

今まで誰もいない庭園だったのに、不意に男性の声がして視線を戻す。

「あ……っ」

そこに立っている男性を見て、驚きで思わず声が出る。

（この人、面接に来る前に私をレストランに拉致した人！）

「また会ったね」

すると彼は少し微笑んで、芝生を踏みながらこちらへ近づいてきた。

（この前はしっかり容姿まで見てなかったけど、結構若いよね）

年齢は二十七、八くらいだろうか。

高級そうな仕立てのスーツがビシッと決まっていて、ジャケットの襟にはドラマなどでも見たことのある弁護士バッジをつけている。

（やっぱり弁護士さんだったんだ）

「この前はありがとう」

私の目の前まで来ると、彼は親しみのある笑顔を浮かべて言った。

「いえ、私はなにもしてないですから」

「いや、君のおかげだ。面倒な人につきまとわれて参ったところだったから……って

「うか、君、秘書に応募してきた人？」

「あ、はい。そうです」

戸惑いながら言葉を返すと、彼は隣にストンと腰を下ろして私の顔を覗きこんだ。

「君、なにか不思議な女性だよ。周囲四十五センチ以内にて、なんともない人って珍しい」

「四十五センチ、ですか」

「パーソナルスペース。相性が悪い人の場合、至近距離では拒絶反応が出るんだよ」

言われてみるとほとんど知らない人なのに肩が触れそうなほど近い距離に違和感はない。

（先日唐突に肩を抱かれた時も、驚いたけど嫌じゃなかった。それに相変わらず声がいし……この人の側にいられるなら耳福だなあ）

そんなことを考えていると、彼は面白そうに口元を緩めた。

「面接、どう？ 通りそう？」

覗きこんでいた顔をさらに近づけ、私を見上げてくる。

その視線があまりに強いから、まともに見返せなくてドキドキしてきた。

「ええと……」

（この人距離感おかしいのかな。拒絶反応はないまでも、近すぎる気がするんだけど）

声が好きみな上に整った顔立ちが近くにあると、推しのアイドルにでも会ったかのようなソワソワ感が出てしまう。

返事をどうしようか迷っていると、彼は構わず私のほうへ肩を寄せてきた。

「あの……？」

「そのペン、お気に入りなの？」

「へ？」

指差されたのは、私が手にしているボールペンだった。

頭に漫画キャラクターがコミカルにデフォルメされたマスコット『ニャンペン』が付いているやつだ。

「はい。シリーズで十種類あるんですけど、特にこのマスコットが大好きで」

「へえ」

（子どもっぽいって思われたかな）

彼は興味深げに私のボールペンについているマスコットを指でつくくと、ふと顔を上げて私を見た。

「君、自覚してないかもしれないけど、なかなかのラッキー体質だ」

「？ どういうことですか？」

「まず、面接前に俺と面識がある時点で相当なラッキー。その上、今日面接にまで進め



ているのは君だけなんだ」

「ええっ!？」

「だからどんなラッキーガールなのかなと思って見に来たら、あの時の子だったからますます驚いたってわけ」

募集をかけた時は、何百件ものエントリーが殺到したらしい。

それを柴崎さんが猛スピードでチェックし、合格を出したのが私だけだったと——そういうことらしい。

(まさかと思ったけど、本当に私だけだったとは……!)

「数名は残るかと思ったんだけど、そうはならなかった」

「柴崎さんて、履歴書だけでどんな人かわかっちゃう人なんですか?」

「まあね」

柴崎さんは顧客と弁護士をマッチングさせるのにもすごい能力を発揮するのだとか。

「相性を嗅ぎ分けるプロって感じかな」

「……そうなんですか」

(そんなプロがいるなんて、知らなかった)

「でも、所長がだめって言ったら合格にはならないですよね」

「そうだね。そうなったらまた一から募集のかけ直しだから大変だな」

他人事のように言い、彼は突然自分の胸ポケットから万年筆を取り出して言った。

「出会った記念にそのマスコットペン、俺のこれと交換しない?」

「え?」

差し出されているのは、いかにもブランドものの高そうな万年筆だ。

とても数百円で買ったボールペンと釣り合う感じがしない。

「いえ、そんな高価そうなものと交換するようなものじゃないです」

(普通に文具屋に行けば三百円くらいで買えるものだし)

万年筆を受け取らずに断ると、彼はうーんと考えたあとパツと目を見開いた。

「じゃあ君を本物のラッキーガールにしてあげる」

「は?」

「ここに勤めたいんじゃないの?」

「それはそうですけど。まだ所長面接が……」

「大丈夫、俺がその所長だから。三国芽唯さん、君は合格だ」

彼はそう言って、あつという間に私からボールペンを奪ってベンチを立った。

「あ、あのっ」

(なに言ってるのよ。所長がこんな若い人なわけ……あれ、そういえば所長の年齢聞いてないな)

「じゃあまた明日」

驚く私を残し、その人はスタスタと建物の中に戻ってしまった。

「それは間違いなくうちの橘です。どうやら、面接をするまでもなかったようですね」  
 (ああ……やっぱりそうか)

戻った応接室で、あの人が間違いなく所長である橘公輝さんだと確認が取れてしまった。

「すぐお若い方だったので、事務所の弁護士さんかと思ってしまっ」

(絶対あの態度、馴れ馴れしかったよね)

「橘は今年二十八歳ですので実際若いですよ」

「とはいえ、所長さんには違いありません」

(絶対あの態度、馴れ馴れしかった)

柴崎さんは真顔でそう答えると、スマートフォンに目を落とす。

「所長からメッセージが来ました。どうやら所長は三国様を気に入ったようです」

「そ、うなんですか?」

「ええ。採用決定です。おめでとうございます」

「っ、ありがとうございます」

(えー……あんな雑談だけでOKになるものなの?)

だって仕事の能力とかを買ってくれた雰囲気じゃなかった。

ラッキーガールとか言って、気まぐれに「合格ね」って言ったような気もするし。

あつけない合格判定に戸惑っていると、柴崎さんは神妙な顔で付け加えた。

「これは今思いついた提案なのですが。もし三国さんさえご了承いただけるなら、橘のストーリー対策にも協力してもらえませんか」

「ストーリー対策!」

これまた面倒……いや、大変な内容の仕事に驚く。

「橘を慕ってくれるのは嬉しいのですが、クライアントの中にはこちらが対処しきれないほどの方もいらっしゃるかもしれません……」

「ああ……」

(初対面の時に遭遇したあれ……五島さんが日常って言ってたもんね。大変そうだな) しつこい女性に絡まれると機嫌が悪くなる橘さんの集中力低下を避けるため、それとなく諦めてもらうよう私にも協力してほしいという。

「私にできますかね」

「あなたならできそうだと感じております。ただ……一つだけ注意点が」

「なんでしょうか」

「橘とは一定の距離をとっていただきたいのです。これはプライベートな話になります

が、橘は由緒ある家柄の長男でして」

最近では聞かない。家柄」という響きに、ピクリとなる。

私はあまりそういう古い体質の話は好きではなくて、もう時代が違うのだからどんなに由緒ある家の子ともだって自由にやりたいことをやったほうがいいと思っっている。

でも、橘さんはそうも言い切れない事情を抱えているみたいだ。

「ご結婚をされて、早々に後継を……と、期待されているお方なのです」

「そうなんですね」

（びっくり。まだそういう家柄ってあるんだな……自分には縁がない話だなあ）  
驚きを通り越して、うっかり親しげな口も利いちゃいけないんじゃないかと緊張してしまふ。

（まさか私が橘さんと変な関係になるんじゃないかって心配されてる？）

「でもそういう方なら許嫁がいっしょやるんじゃないですか？」

「いえ。候補者は時々ご紹介しているのですが、今のところ公輝様にご結婚の意思がなく……旦那様は頭を悩ませているようです」

「なるほど……」

この問題は柴崎さんにとっても頭を痛める問題なのか、深刻そうに眉根を寄せた。  
橘さんの呼び名も普段呼び慣れているのであろう。公輝様」になっていて、私はすっ

かり柴崎さんの相談相手になってしまった。

「ご事情はわかりましたけど、私は身分もなにもない人間なので。必要以上に親しくなるつもりはないですから」

真剣に仕事を探している私としては、軽く見られている感じがしてちよつと嫌な気分だ。

「私はここで一生懸命仕事をするのしか考えていませんので」

念押しで言うと、柴崎さんもハツとした顔をして慌てて頭を下げた。

「不愉快にさせたのでしたら申し訳ありません。ですが私情のもつれが一番厄介なので」

「いえ、大丈夫です。柴崎さんのお言葉、しっかり肝に命じておきますね」

私の真剣な言葉に安心したようで、柴崎さんは表情を和らげた。

「もしかして……と思ったのは、私の考えすぎのようです」

「もしかして、とは？」

「所長が自分から女性に近づくことは稀なので……いえ、私が勘ぐりすぎました」  
そう言ってから、彼は今後の仕事について一通り説明してくれた。

一般的な事務作業はそれほど問題ない。

最も大変なのは橘さんのやる気を維持させるという任務……私にも予測不能の仕事だ。

「この事務所にはあと二名の弁護士と事務員が一人在籍しております。明日以降でタイミングが合いましたら紹介いたします」

「わかりました」

（大変なのは覚悟の上だし……とにかく頑張ろう）

そんなことを思いつつ、私は怒涛の面接を終えたのだった。

## 第二章

翌朝、早速事務所に初出勤した私は、すでにミーティングを済ませていた他の所員に挨拶をした。橘さんとは別のクライアントを抱える弁護士さん二名と、事務全般を担っている方を合わせて三名だ。

「三国芽唯です。法律関係の仕事は初めてなので、いろいろとご迷惑をおかけするかもしれないませんがどうぞよろしくお願いします」

「タチバナ法律事務所へようこそ、金城かねしろです。事務所内でわからないことがあったら聞いてください」

頭を下げると同時に、柴崎さんよりは若干若そうだけれどかなりベテランな雰囲気

の弁護士さんが手を差し出した。

「はい。よろしくお願いします」

挨拶の握手を交わすと、金城さんの隣に立っていた女性の弁護士さんも握手を求めた。

「工藤くどうです。橘さんの相手は大変だと思うけど、頑張つてね」

この方もベテランな雰囲気があつて、笑顔にも余裕が見えた。

三人がいる部屋のムードも全体的に落ち着いている。

（よかった、このメンバーならうまくやっていけそう）

「精一杯頑張ります！」

「ふふ、マイペースでいいと思うわよ。柴崎さんが認めた方なら間違いないでしょうから」

「ありがとうございます」

皆さん優秀な方ばかりで、自分がこの事務所のメンバーになるのが不思議な気分だ。

「三国さんには、所長室の横にある控え室で仕事をしてもらいますので」

「はい」

「昨日もお伝えした通り、主な仕事は身のお世話と所長のモチベーション維持です。くれぐれも口答えなどはなさらないように」

「わ、わかりました」

所長室へ向かいながら、柴崎さんからこんな忠告をされてしまい、緊張感が高まる。

(あの癖の強い所長と一対一でやりとりするのか……できるかな)

とは思うものの、これが高給の理由だと思うと納得しないわけにいかない。

純也は少しずつ元気が戻り、プログラミングのバイトも順調らしく、かなり前向きな気持ちになってくれている。

ここで私の頑張りがなくなったら、また借金に追われる生活に戻ってしまうかもしれない。

(すべてを代わってあげられるわけじゃないけど、純也にはとにかく心配事を減らして次のステップを踏めるようになってほしい)

その一心で、私は覚悟を決め、所長室のドアをノックした。

「どうぞ」

中の声に従ってドアを開けると、ペンを交換したあの男性が立派な椅子に座っていた。(当たり前だけど、やっぱりあの人が所長の橘さんだったんだ)

面接より前に会うなんて、確かに妙な縁があるものだなと自分でも思う。

おかげで無事仕事を得るに至ったのは感謝すべきなのか……

「——という日程になっております」

私がぼうっとしている間にも柴崎さんはテキパキと今日の予定を伝えた。

「新規のクライアントは？」

「本日は三件、面談の希望がございます。すべて午後に集中させましたので、午前は書類に集中できるかと」

「わかった」

「詳細は三国さんにメールでお渡ししますので、スケジュールのご確認は彼女から聞いてくださいませ」

「そうするよ」

「では私はこれで」

柴崎さんは深くお辞儀をすると、私の方へ向き直り軽く会釈した。

「三国さん、あとのことはお願いします。わからない点がありましたら遠慮なく私に尋ねてください」

「はい。ありがとうございます」

柴崎さんは厳しい目を一旦私に向けると、音もなく所長室を出ていった。

所長を丁寧に扱えという圧を感じ、背筋が伸びる。

やや怯みそうになる気持ちを立て直し、私は改めて所長にも挨拶した。

「三国です。本日から橘さんの秘書としてお仕事させていただきます。よろしくお願いします」

いたします」

「よろしく。俺のことは橘でも公輝でも、呼びやすいようにどうぞ」

「わかりました」

想像していた神経質な弁護士という印象とは違って、橘さんはどこか捉えどころのない不思議な優雅さを感じる人だ。

凛々しい表情もするけれど、たまに見せる笑顔には上品なものが感じられる。

（家柄がいい人っていうのも頷ける）

「君、給料がいいからここに応募したんだって？」

素敵な人だと思っていた矢先、鋭い質問が飛んできた。

「え、あ……はい。まあ」

「へえ、そんな金に目が眩んだ人間には見えなかったけど」

どこかがっかりしたような響きがあったけれど、私はそれを否定することができない。

（実際、今私はどんなものよりお金が必要だ。自分のためではないんだけど……でもそんな事情をここで言うのも変だし）

「お金が好き人間ではないじゃないか」

私の質問に彼は笑って手を軽く振った。

「別にだめとは言っていない。ただ意外だったただけだよ」

言いながらカップのコーヒーを口にし、ふっと眉根を寄せた。

「駅前ショップのブレンド、今日は美味しくないな」

（朝はコーヒーが必須の方なのかな）

彼はカップを机の横に退けると、様子を窺っていた私を見た。

「ごめん、アネモネで淹れてもらってきて」

「アネモネって、あのレストランですか」

「そう。少し離れてるけど確実に美味しいから。お願いできる？」

オーナーである五島さんのことはとても信頼しているらしく、豆も常に最高のものなのだと説明してくれた。

「わかりました、淹れてもらってきます」

「うん。あ、豆はコロンビアでって伝えて」

「はい！」

（よし、初仕事だ）

こうして初仕事はコーヒーのテイクアウトということになったのだけれど、そのあとは、スケジュールの確認や移動のための車を手配するやら。それなりに秘書っぽい仕事もこなしていた。

（順調だ。これくらいならなんとか仕事をこなしていけるかも）

そう思っていた矢先、新規案件を相談に来たお客様へのお茶出しを頼まれた。  
なにやら深刻そうな様子の二人の女性だったけれど、温かい飲み物で心が和むならと  
紅茶を準備する。

「ええと、お湯は沸いたから……ティーバッグを……」

慣れない給湯室の使い方にまごまごしていると、うつかり手が滑って皿を落としてしまった。

ガシャン！

静かな空間に陶器の割れる音が響いた。

お客様がいる部屋が隣だったため、おそらく相当に響いたに違いない。

「し、失礼しました！」

すぐにお詫びの言葉を口にしたものの、そのお客様は憤慨ふんがいした様子で部屋を出てくる。

「話を続ける気持ちが削がれました。もう結構です」

（えっ）

「ご不快にさせてしまい、申し訳ありませんでした」

引き留めるでもなく、橘さんはそう言っただけで軽く頭を下げた。

帰っていくお客様をフォローするように、柴崎さんがエレベーターのボタンを押してあげたりしている。

（これって……もしかして、大失態してしまった？）

「申し訳ございません」

「謝ってもクライアントは戻らない」

「……………」

お客様が帰ってから、私は所長室で橘さんと向かい合っていた。

彼は腕を組み、冷静な表情で私を見下ろしている。

（早くもしてかしてしまった……）

「あの……私、秘書を辞めたほうがいいですか？」

「どうして」

「だって大切なお客様を逃してしまって。私にはどうすることもできないので」

「……君は自己犠牲的すぎるね」

呆れたようにその口になると、彼は腕を解いて少し表情を和らげた。

「先方は気が立っていただけだし、君が皿を割ったのは不愉快だったけれど、仕事上は大したことじゃない」

「そう、なんですか？」

「やり直しが効かないほどのミスなんてそうないよ」

（最初からそう言ってくれば……っ）

もう取り返しがつかないに違いないと思っていた私は、脱力してその場に崩れそうになった。

「私、まだこちらでお仕事させていただいていいんですか？」

「一つお願いしたいことがあるとしたら、もう少し堂々としてほしいかな」

「わ、わかりました。気をつけます」

「うん」

（よかった……っ）

橘さんは安堵する私から目を離すと、ソファの背にかけていたスーツのジャケットを手を取った。

「午後はランチを取ったら買い物するから準備しておいて」

「買い物……橘さんの買い物ですか？」

「君のスーツだよ」

「スーツ……？」

「これから君は俺の秘書として外に出ることも多くなる。変な姿で品位を落とされても困るから」

「ひ、品位」

（今のスーツじゃあ品位が保てない!?）

多少ショックではあったけれど、確かにブランドスーツを身につけているわけではないからなにも言い返せない。

結局この日の午後、私たちは橘さんの希望する秘書としてのスタイルになるために高級ブランドショップへと向かった。

「いらつしやいませ」

気後れるような煌びやかな店内に、怯んでしまいそうなほど美しい店員。

こんなに高級そうな店で買った物がないから、なにをどうしたらいいかわからない。

すると橘さんが私の頭から足先までをまじまじと見て、店員になにか伝えた。  
「かしこまりました。ぴったりのものをご用意いたします」

なにをかしこまったのかわからないけれど、持ってこられたスーツはかなり細身のもので、スカートとパンツ両方が揃っている。

（どんなブラウスにも合いそうだし、着回ししやすいそうだな）

そんな色気のない感想を抱いた私だけれど、試着してみてもそのピッタリ具合に驚いた。  
「こんなにピッタリなのに苦しくない！」

「うん、そのスーツでいいと思う。スタイルというのは服で決まるものなんだと改めて思うよ」



(どういう意味?)

橘さんの言葉にはカチンとしたものの、スーツは文句なしに素晴らしい。さらに宝石店へ足を運ぶと、控えめでありながら高級感のあるイヤリングを勧められた。

アクセサリー一式も相当に値の張るものだった。

(綺麗、だけど……高いなあ)

「試しにつけてみたら」

「あ、はい」

「ごゆっくりお試下さい」

店員はフィッティングルームに私たちを残して一旦退出した。

並べられたイヤリングを一つずつ試してみると、どれも素敵で迷ってしまう。

「うーん……」

「なにを迷ってるの」

「一日つけて痛くならないのが一番いいんですね」

「……なるほどね」

言いながら不意に耳の縁を指で触れられ、びっくりして飛び上がる。

「な、なんですか」

「耳の厚みを見ようと思ったただけだけど?」

「なにも、触らなくても……」

「へえ、耳が弱点なんだ」

「っ!」

突然彼の瞳が意地悪く光ったのを見て、錯覚かと瞬きをしてしまう。

穏やかでフラットな印象だった橘さんが見せた、意外な顔だった。

(なんだろう、この……体の自由が効かなくなる感じ)

軽い金縛りにあったように動きを止めていたけれど、彼が視線を外すと同時に一気に

緊張が緩んだ。

「このイヤリングが合っているみたいだな」

それは雫のような小さなダイヤがぶら下がった綺麗なイヤリングだった。

心は惹かれるけれど、どうにも値段が気になる。

(指輪と変わらないような値段だった気が……)

「秘書がこんな高いものを身につける必要、ありますか?」

「事務所に必要なものだから購入する。これは個人的なプレゼントではないし、代金は一切気にしないでいいよ」

「そう、ですか」

（橘さんにとって必要なことなのだったら仕方ない。この仕事を辞める時、お返ししよう）

「で、あとは——」

下ろしていた髪の毛先をぐっと掴まれて、耳の時よりもさらに驚く。

「つ、今度はなんですか」

「髪なんだけど、明日からは後ろで一つにまとめてきて」

「ええと……今もバラつかないようにサイドは留めてますけど。これじゃだめでしょうか」

「口答えしないで、言われた通りにして」

（なにその言い方！）

憤慨<sup>ふんがい</sup>している私に構わず、彼は有無を言わさぬ調子で続ける。

「一般的な秘書の装いにしてもらいたいんだ。俺の言った通りにしてくれない？」

（しまった……機嫌を損ねた）

「わ、わかりました。明日からその理想図に近づけて出勤いたします」

「そうして」

肩をすくめると、私はそれ以上余計なことを言わないよう口をつぐんだ。

（俺様気質なのかな……柴崎さんが言っていた気まぐれってこういうこと？）

## 立ち読みサンプル はここまで

口答えしてもあまり意味がないと思い、私は明日からは素直に一つに束ねてこようと思った。

そんなことがあった翌日、別室で仕事をしている金城さんが困った顔で所長室を訪れた。

（珍しいな、金城さんがこんなに困った様子なのは）

「どうした」

橘さんが話を聞く体勢になると、金城さんは神妙な顔で事情を話した。

「離婚訴訟で母親を助けてほしいという中学生が来てまして」

「ほう」

「お金はないけれど、高校生になったらアルバイトして払うからって言うんです」

（健気<sup>けんげ</sup>だな……なにか力になってあげたいよね）

私がすっかり同情的になっている中、橘さんは即答した。

「それはここでは受けられない案件だな」

（えっ……検討もせずにそんな決断するんだ？）

やや引いた気持ちでいると、橘さんは髪をくしゃっと撫でて改めて金城さんを見る。

「まだいるの？」